

# 神々の移住地 豊の国

(続 四)

昴 崇

## 五節 宇佐地方の立石と神話伝承

古代、「耽羅(タムラ)」の国。

現在の韓国、済州島(チエジュド)は、寒い朝鮮半島とは異なって、その気候は温暖である。

山々にはミカンの木が生い茂り、人里には柑橘類の甘い香りが漂う。そんな美しい風土に憧れて、この島を新婚旅行の場所として選ぶ人も多い。

だが、古代から現在に到るまで、この島は一つの大きな問題を抱えている。

全島が火山岩質であるため、田畑

が作りにくく、食料が足りないのである。

食糧問題を抱える土地の人々は、必然的に他の土地との交易を強いられる。

現在の済州島は、基幹産業のミカン栽培で収入を得て、主食である米を韓国本土から買い求めている。

これに近い状況は、きつと古代からも変わりなく続いているのだろうし、その交易の相手は穀倉地帯であったに違いない。

済州島から最も近い穀倉地帯とは、朝鮮半島南部なのだろうが、その時代の政治情勢によって、交易の相手は変化する可能性もある。

済州島から近い距離にある対馬

は、土地が険しくて田畑が作りにくく、杵岐の島も田畑の面積は広くない。

古代の済州島にとって、北九州の玄海灘沿岸地域は、良い交易の相手だったのではないか。

済州島には支石墓が分布し、北九州にも支石墓は多く分布している。

朝鮮半島の支石墓が北九州に伝わった原因とは、一説には、紀元前六世紀頃、朝鮮半島北部から銅剣を祭器とする民族が移住して来て、支石墓を造っていた民族が徐々に南へと押し出されたため、だという。

これが事実ならば、古代の済州島は、朝鮮半島よりも北九州との交易を重視していた時期があるはずだ。

このような古代情勢を反映した神話の伝承地が、済州島北岸中央地域の「三姓穴(サムソンギョル)」である。

「三姓穴」とは、済州島の創世神話の舞台である。

島固有の姓だとされる、良氏、高氏、夫氏の三人の始祖は、この土地

の地中から現れたという。

済州島の創世神話では、おおよそ以下のような内容が伝えられている。

「初め、人がいなかった。

あるとき、穴から三神人が現れた。

三神人の名は、年上から、良乙那、高乙那、夫乙那。

三人は荒地で狩猟をして、皮の衣を着て、肉を食べて暮らしていた。

あるとき、島の東海岸に木の箱が流れ着いたので、これを開けてみると、紫の衣を着た一人の使者が出てきた。

木の箱の中には石の箱も入っていて、その中からは、青い衣を着た三人の女と、子馬と子牛、五穀の種子が出てきた。

使者は言った。  
『私は日本の国使です。わが王は、この三人の娘を生みました。西海の岳に、神の子が三人降って国を開こうとしている話を聞き、そのためには妻がいなくてはならないと思い、家来に命じ、三人の娘を送ったのです。どうぞ大業を成し遂げてくださいます。』

使者は口上し終わると、雲に乗って去った。

三人は年齢順に妻をめとり、泉の甘く土地の肥えた所へ行くべく、矢を射て土地を占った。」

この創世神話は、様々な時代の記憶が幾重にも積み重なって成立したのだろう。

ところが、日本の神話に関心を持つ人にとっては、一つ気になる部分がある。

“日本の王が三人の娘を送った”という内容である。

不思議なことに、これと関連するかのような記述が、「日本書紀」の神代巻には記されている。

それは、以下のような記述である。  
「日の神が生まれた三柱の女神を、葦原中つ国の宇佐嶋に降らせられた。今、北の海路の中においてになる。」

この記述の前後を読んでいくと、どうやら「日本書紀」の編者は、日の神とは皇祖神アマテラスの別名だ」と言いたいようである。

“三柱の女神とは、アマテラスの

三人娘”。

つまり、これが「日本書紀」の主張なのだが、真実を追求する人ならば、神話をそのまま事実として扱ってはいけない。

日本神話研究の分野では、この“三柱の女神”とは、北九州古代豪族の宗像氏の祖先だと考えられている。

七世紀、宗像氏は、時の天武天皇に妃を送った。

宗像地方の津屋崎に鎮座する宮地嶽神社は、全長二十三メートルにも及ぶ長大な古墳石室を御神体としている。

古代宗像氏の大きいなる繁栄を物語る遺産である。

その古墳の築造は七世紀前半頃だと考えられている。

被葬者は、胸形君徳善（むなかたのみきみとくぜん）だと推定されている。

天武天皇の妃、尼子媛の父親である。

「古事記」や「日本書紀」におい

て、三柱の女神が皇祖神の系図に組み込まれた理由は明解だ。

古代ヤマト王権は、大陸との交易を行なうために、優れた航海術を持った古代宗像氏の勢力を必要としていたのだろう。

三柱の女神を祭った宗像大社には、玄界灘の潮の香りが漂う。

宗像大社の神域は広く玄海灘の島々にまで及び、大島には中津宮、沖ノ島には沖津宮が鎮座する。

絶海の孤島である沖ノ島は、島の全体が宗像大社の御神体だといえよう。

一九五四年からの三度に渡る学術調査では、島内の二十三箇所祭祀遺跡から膨大な数の遺物が見つかった。

西域伝来のカットグラス、金銅製の馬具、純金製の指輪、魏代の舶載鏡など、豪華な品々を現代にまで保存してきた沖ノ島は、“海の正倉院”とも呼ばれる。

沖ノ島での国家的な祭祀は、四世紀後半から十世紀初頭まで続けられ

た。

興味深いことに、五百年以上にも及ぶ祭祀期間においては、遺物の奉納場所が四段階に変化しているという。

それらの祭祀遺跡の立地条件は、最終段階では露天祭祀が行なわれ、その前の時代が半露天・半岩陰祭祀、その前が岩陰祭祀、最も古い段階では岩上祭祀が行なわれていたようである。

そして、その岩上祭祀遺跡は、縄文巨石文化と原始神道との接点である。

沖ノ島の「二十一号岩上祭祀遺跡」では、巨岩の上から環状列石のような遺構が見つかっている。

その配石遺構の形は、円形というよりは方形であるものの、やや大きい石を中央部に配置した構造は、縄文時代の環状列石の構造と似ている。それは北極星信仰の記憶を表現した構造である。

環状列石の原点から延びる、時間の軸と空間の軸。

縄文前期信州から四世紀後半の

宗像地方へと伝わった時点で、環状列石は形や立地条件が大きく変化した。

紀元前六世紀頃の宗像地方では、水田稲作を伝えた民族と縄文民族が共生し混血して、やがては一つの小国家を形成していったのだろう。

一方、宇佐は宗像よりも、より縄文文化の純度が高い地方である。

文献以前の時代から、文献以後の時代へ。

沖ノ島は、先史時代と歴史時代の接点なのだ。

古代における何百年もの間、北九州とヤマトは長い闘争を続けた。

その闘争に終息が訪れた時期は六世紀の前半である。

それは従来、「磐井の反乱」などと呼ばれてきたものの、実際には東アジア情勢を左右する戦いであったようだ。

その戦いでは、北九州側には新羅（しらぎ）が味方し、ヤマト王権側は百濟（くだら）と同盟関係を結んでいた。

北九州側の盟主は「筑紫国造磐井（つくしのくにのみやつこいわい）」、ヤマト王権側の君主は継体天皇。

そのために、「継体・磐井戦争」という呼び方もある。

「日本書紀」によれば、その戦は一年余りに渡って続けられたという。

磐井氏の本拠地は筑後川下流域であり、筑後川の南側に連なる耳納山地の西の端、高良山は防衛上の一大拠点であったらしい。

この高良山から筑後川上流の日田盆地までは、川の両側に山地が連なっているため、その地域の両端の防衛を固めれば、強い城塞都市の建設が可能である。

大陸との交易の利便性も含めて考えれば、古代北九州の中枢拠点が筑後川下流域に存在した理由は理解しやすい。

古代北九州の攻防について理解を深めるためには、幾つかの軍事拠点の所在地を頭に入れておく必要がある。

なお、高良山の頂上付近には高良大社という古社が鎮座している。

その祭神の実像は謎に包まれている。

#### ・ 神話伝承の六要素

神話伝承が発生する条件とは何だろうか。

幾つか考えられる中で最大の条件とは、“異なる民族や文化の接触”ではないか。

異なる風習を持った二つの民族や部族が遭遇した時、そこに発生する関係とは、支配と被支配であり、調和共生が成り立つ例は少数であるう。

調和共生を達成した数少ない例としては、済州島の創世神話がある。その神話には、支石墓の風習を受け継いだ民が、縄文の民の子孫と遭遇した時の記憶が隠されている。

無益な戦乱を回避し、相互理解を成立させた、二つの民の智慧。それに反して、戦乱の記憶を伝えた神話は非常に多い。

神話伝承では、王族の出自が“お

とき話”として語られる。

例えば、ある国の王族の出自が遠い土地である場合。

“天から卵が降りてきて、その中から王様が生まれた”、という説話が発生することがある。

長い距離を短期間で移動する手段を持つ民族の、創世神話の一つの形である。

遠い土地に住む民族の姿は、神秘的で推し測りにくい。

そして、その記憶は時間と空間の軸に運ばれて、数え切れない伝言ゲームが繰り返されることにより、説話の形が少しずつ変化していく。

一つの説話が、長い年月を経て遠い土地にまで伝わった時、一体どのような形に変化してしまうのか。

“王様が白い布に包まれて天から降りて来た”

これも変化の一つの姿である。

さて、神話伝承の研究とは、数学とも物理学とも異なり、人の心理を扱った分野なので、個々の説話は不鮮明で、理論の展開それ自体にも困

難を伴う。

そこで、この分野の研究を明確にするために、神話伝承を六つの要素に分解して考えてみよう。

いつ (when)、どこで (where)、誰が (who)、何を (what)、どのように (how)、なぜ (why)。

五つのwと、一つのhが、神話伝承の六要素である。

個々の説話には、それぞれ原形があるものの、六つの要素は時代の流れとともに少しずつ変化していくため、長い年月の経過によっては、説話の形は大きく変化してしまう場合がある。

それらの中でも、説話の原形を最も大きく変化させてしまう要素は、おそらく三番目の要素(w h o)ではないか。

例えば、飛騨一ノ宮の位山には、“神武天皇が訪れて、山の主「両面四ツ手」から位を授けられた”、という伝承がある。

一方、文献資料における飛騨の最古の記録、「日本書紀」仁徳天皇六十

五年の部分には、この伝承と関連するかのような記述がある。

“仁徳天皇からの命を請けた將軍の武振熊(たけふるくま)が、二つの面と四本づつの手足を持つ「宿儺(すくな)」を誅した”

「日本書紀」は八世紀に編纂された文献であるために、説話の形は八世紀から大きく変化してはいないのだろう。

しかし民間伝承は、古代から現代に到るまで無数の伝言ゲームが繰り返されるために、説話の形が原形から大きく変化してしまうのである。

位山伝承の(w h o)の部分を、神武から武振熊(仁徳天皇の使者)に置き換えれば、説話が持つ違和感は幾分か解消する。

位山伝承の主役X氏は、時代の流れによって神武天皇に変化してしまつたのではないか。

また、「日本書紀」はヤマト王権からの観点であるものの、位山の伝承は飛騨からの観点である。

神話伝承には、文献と民間伝承があり、中央からの観点と地方からの

観点がある。

以下は、神話伝承研究の要点である。

一、神話伝承は、異民族や異文化の接触によって発生しやすいので、考古学を頼りにして、一つの地域社会が大きく変化した時代を推定する。

二、墓制や祭祀遺跡、集落遺跡などから、外来の勢力と土着の勢力について、それぞれの生活様式や宗教観を推定する。

三、その時代に照準を合わせ、地域の民間伝承を六つの要素に分解し、その時代の様相から大きく離れている要素は修正していく。

四、ヤマト王権の文献の中に、その地域についての神話伝承の記録があれば、その地域の民間伝承と比較して照合していく。

なお、神話伝承は確かな実体を持っていない為に、文献や伝承を頼りにしていると、いつか必ず研究は行

き詰まり、アリ地獄に入り込んでしまふ。

ヤマタイ国論争などにおいて、いつまでも夜明けが訪れない理由は、研究者が文献を過信しているからではないのか。

行き詰まったら引き返して、考え直してみる研究姿勢。

考古学の物的証拠を基本とし、文献と神話伝承を参考にするならば、古代の研究は大きく進歩していくに違いない。

#### ・ 豊の国と景行天皇

宇佐といえば、八幡信仰を連想してしまう人が多いけれど、信仰の歴史は単純ではなく多重構造である。

八幡神とは応神天皇だとされ、その伝承の年代は五世紀であるらしい。ただ、宇佐には応神天皇の伝承は伝わっていないようであるし、「古事記」や「日本書紀」、「風土記」にも、

応神と宇佐との関連は記されていない。

だが、「日本書紀」応神天皇の記録には、大陸人の大量帰化を示す記述もある。

百濟から百二十県の人が帰化しているようなのである。

「古事記」応神天皇の記録には、秦氏の祖先が渡来した話も記されている。

これらの話と八幡信仰の起源とは、何らかの関係があるのだと思う。

一方、考古学の観点から五世紀の宇佐について考えてみた場合、その時そこで大きな変化が起きていたと言えるのだろうか。

やはり、宇佐にとつての最も大きな歴史的变化といえは、三世紀末から四世紀前半にかけて、ヤマト王権が前方後円墳を伝えた事ではないか。その頃に九州で造られた前方後円墳の分布地域は、何故か、「日本書紀」景行天皇の九州遠征記録と一致する部分が多い。

（「古事記」では、景行天皇の九州遠征が全く語られていない）

それまでヤマトは、大陸からの支援を受ける北九州勢力に押され

ていた。

しかし、大陸の情勢が不安定になり、北九州と大陸との政治的關係が弱くなるに連れ、勢力のバランスはヤマトへと傾き始めた。

大陸の諸文献において、四世紀の日本の記録が乏しい理由は、交易や朝貢などの交流が行なわれていなかったためであるらしい。

さて、「日本書紀」の記述では、景行天皇が九州に上陸するまでの様子を、おおよそ以下のように伝えている。

天皇は周芳の佐波(すわ・さば)に到着し、南を望み見て、その土地を部下達に偵察させた。

その土地には神夏磯媛(かんなつそひめ)という女がいて、はなはだ仲間が多く、一国の長であった。

神夏磯媛は天皇に帰順し、四つの川の上流に棲む賊の征伐を天皇に頼んだ。

景行天皇は、豊前の国の長峽県(ながおのあがた)に到り、仮の宮を造って、その土地を京(みやこ)

と名付けた。

これらの記述における第一の要点は、北九州の勢力が関門海峡を抑えていた時代があった、ということだろうか。

この海峡一帯を支配することにより、北九州(特に筑前や筑後)の勢力は、大陸からヤマトへの交易の流れを制限していたのではないか。

記述では、何故か景行天皇は関門海峡には向かわず、現在の山口県防府市佐波あたりに拠点を構え、部下達を船で南へと向かわせているのである。

そこは縄文人の子孫が多く住む土地であり、縄文巨石文化が最後に大きく栄えた土地である。

なお、「豊後国風土記」には、国埼(くにさき)、国見などという地名の由来が語られている。

第二の要点は、ヤマトと豊の国との関係である。

ヤマトと神夏磯媛との関係は、やや友好的に描かれている。

ヤマトにとつて、九州遠征の目的は、南九州へのクマソ征伐ではなかった。

敵の本丸は、筑後側下流域に存在していた。

だが、その勢力は何百年もの交易で大きな富を蓄えていたので、本丸を直接責める作戦は不可能だった。

そのためヤマトは、城の外堀を埋めるように、本丸周辺の勢力と同盟を結び始めたのである。

文献の上では、ヤマトの九州上陸第一歩は、本州に最も近い豊前地方とされている。

一方、これを考古学的観点から考えると、もう少し詳しい事実が判明してくる。

ヤマトの勢力が伝えた墳墓とは、前方後円墳である。

前方後円墳が発生した場所は、ヤマトの三輪山麓、纏向(まきむく)という土地である。

それが発生した年代は、三世紀前半から中頃だという説がある。

一般的に、前方後円墳といえは、前方部と後円部が同じく大きい

さで、その接合部分が太い形を思い浮かべてしまうけれども、その発生期においては、接合部分は少し細くなっている、花瓶のような形をしていた。

この形の墳丘墓は「纏向形前方後円墳」と呼ばれている。

そして、この「纏向形」は三世紀後半以降になると、房総半島、加賀、吉備、阿波、筑前、筑後、などに伝わっていく。

九州での「纏向形」は、福岡県の嘉穂盆地、博多平野、筑後川下流域北岸など、限られた地域にのみ幾つか分布しているようである。

ただ、「纏向形」が筑後川下流域の南岸にまで伝わっていないことは、よく認識しておくべきであろう。

その地域こそが、北九州小国国家連合の本丸であった。

この出来事についての記述があるとするならば、それは「日本書紀」神宮皇后の伝記に見出せると言えようか。

考古学の観点では、豊前よりも筑前と筑後の方が、より早くヤマトか

らの波が伝わったことになる。

それらの地域に「纏向形」が伝わってから十年以上が過ぎると、次は豊前地方にヤマトの波が押し寄せている。

その時期の豊前地方の前方後円墳は、柄鏡のような形をしていた。

円と長方形を接合したような形の墳丘墓である。

第三の要点は、一国の首長が女だったという記述である。

神夏磯媛は、土豪としては特別に扱われているような印象も受ける。

その他に登場する女の長は、もう少し小さい地域の酋長である。

神夏磯媛の直後に登場する速水の速津媛（はやつひめ）、神宮皇后の記録に名が見える筑後山門郡の土蜘蛛族の長、田油津媛（たぶらつひめ）。

「日本書紀」では、北九州の有力地域の長は、女として登場している。

宗像氏も、三女神の子孫だという伝承を持っている。

これらは多かれ少なかれ、縄文人の血統を受け継いだ土地であり、水

田稲作を早い時期に受け入れた土地である。

女が首長だということは、シャーマニズムや女系家族制など、その社会形態について考える必要があると思う。

第四の要点は、四つの川の上流域に賊が棲んでいたという記述である。

それら四つの川の名は、菟狭（うさ）川、御木（みけ）川、高羽川、緑野川、である。

現在これらの中で、正確に所在地が判明している川は、菟狭川だけであり、その他の川の名については、かつて豊前地方に存在していたのであろうという説がある。

これらの賊は非常に悪い部族として語られてはいるものの、現実的には、ヤマトからの波が押し寄せて来た時代に、そのまま北九州連合に残る道を選んだ部族なのではないか。

これに反して、神夏磯媛はヤマトと組む道を選んだ勢力の長であろう。

このような記述は、一つの勢力が外からの圧力によって、二つ以上の

勢力に分裂していく姿を表現しているのではないか。

このような出来事が他の土地で起こったならば、海幸彦と山幸彦のような、「兄弟喧嘩の説話」が成立して語られた可能性も有る。

なお、菟狭川とは、現在の宇佐平野に流れる駅館（やつかん）川の古い呼び名であり、その上流域には安心院（あじむ）盆地がある。

そこには縄文人の末裔が多く住んでおり、縄文巨石文化の二大潮流の一つ、立石文化を継承した勢力の一大拠点が存在していた。

第五の要点は、景行天皇が仮の宮を造って住んだ場所に対して、京という名を付けたという記述である。

この記述こそが、宇佐の巨石文化と神話伝承の謎を解く鍵である。

#### ・ 宇佐平野の古墳群

宇佐神宮から北西方向に、二キロ半くらいの田舎道を歩くと、そこに

は「大分県立宇佐風土記の丘」という文化施設がある。

ここは駅館川の東岸で、河口から四キロくらい南へ遡った位置に相当する。

この辺り一帯には、弥生時代の環濠集落や前方後円墳が密集しており、古代宇佐の謎を解くためには必要不可欠な場所だと言える。

これらの遺跡群の中でも、非常に重要な意味を持つ前方後円墳が、「川部・高森古墳群」の内の「赤塚古墳」である。

「赤塚古墳」は、“九州最古の前方後円墳”などと呼ばれる場合があり、ヤマトと宇佐との関係を証明する遺跡だと考えられている。

この古墳の全長は五十七メートルで、その形は「柄鏡形」という分類をされている。

「纏向形」が花瓶の口が開いた形だとするならば、「柄鏡形」は花瓶の首と口が同じ太さになった形だと言えるだろう。

前方後円墳の原形から、少し変化した形なのだと思う。

「赤塚古墳」を訪れた時、その墳丘には木が茂っていて、その手前には来場者の為の石板が立っていた。

その石板には、「赤塚」の墳丘を等高線で表した図面が表示しており、以下のような説明が記してあった。

「赤塚古墳 九州最古の前方後円墳のひとつとして名高い。大正10年に発掘され、箱式石棺から中国製の三角縁神獸鏡4面・三角縁龍虎鏡1面のほか、碧玉製管玉・鉄刀片などが発見された。5面の鏡は、大和政権が地方首長に分け与えたものとみられており、福岡県石塚山古墳の鏡などとともに、初期大和政権と地方豪族との結びつきを示す資料として特に重要である。周囲には幅8・5メートル×11メートルの空濠がめぐる。」

さて、この説明の中で登場する、福岡県の石塚山古墳。

この前方後円古墳は、福岡県内でも周防灘に面する、京都（みやこ）郡刈田（かんだ）町の富久（とみひさ）という土地に存在している。

その全長は約百二十メートル、形は「赤塚」と同じく「柄鏡形」である。

江戸時代の農民による盗掘の結果によれば、この古墳の竪穴式石室からは、十一面の鏡が見つかったという。

（現在、これらの鏡は古墳近くの宇原神社に保管されている）

そして、それらの鏡の中には、「赤塚」出土の鏡と同じ物が含まれていた。

「赤塚」と「石塚山古墳」は、ほとんど同じ時代に築造されたのである。

さらに、この地方を示す「みやこ」という地名。

その地名の由来は、「日本書紀」景行天皇記に記されている。

景行天皇伝説と考古学の物的証拠は、何らかの関係を持っているようだ。

なお、「川部・高森古墳群」は、四世紀前半から六世紀中頃までの、六基の前方後円墳で構成されている。

それらは、ほぼ数十年の間隔で築造されており、宇佐神宮の成立に大きな影響を与えたと考えられている。およそ二百五十年間に渡って、宇佐地方に大形古墳が築造され続けた理由。

それは、筑後側下流域に強い勢力が存在していた為である。

宇佐からは、筑後側上流域の日田盆地へと道が続いている。

まずヤマトは、筑後側下流域の北岸に拠点を築き、次には日田盆地を抑え、敵の本丸を南からも包囲するために、豊前よりも南の地方へと軍を進めた。

時代は流れ、六世紀前半の「継体・磐井戦争」の終息によって、“ヤマト対北九州”という対立の図式は崩れた。

六世紀後半になると、宇佐にヤマトの前線基地を設ける必然性は無くなっていたのだろう。

・ 宇佐平野の巨石文化

三世紀の末頃まで宇佐地方に居住していた勢力は、縄文巨石文化の継承者だった。

そして四世紀前半以降、この地方にヤマトからの波が押し寄せると、宇佐の勢力はヤマトの墓制を受け容れ、自らの巨石文化を忘れていったのではないか。

それは宇佐地方における古墳時代の始まりだと考えてよいだろう。

宇佐平野には幾つかの巨石遺構が在り、それらは神社の境域に存在している。

それらの築造時期は、ヤマトの墓制を受け容れる少し前の時代であるような気もする。

しかし、宇佐が古墳時代に入った後にも、それらの巨石遺構での祭祀は続けられたのではないか。

神社の境域が発掘調査を受ける、古墳時代以降の遺物が出土する、場合が多いようである。

JR宇佐駅の東北二キロメートルくらいの場所に鎮座する、「貴船神社」。

この社は行政面において、豊後高田市の堺という土地に属しているものの、地理的には宇佐平野に属している。

この「貴船神社」は、高さ十数メートルの丘の麓に社殿が造られている。

その丘の内外には、高さが二メートルくらいの立石遺構が幾つか立っており、頂上部にはイワクラも見えた。

拝殿手前の板状の立石遺構は、長い年月の経過により基礎が崩れて傾き、隣りの木に支えられていた。

このように、丘の内外に巨石遺構を構築する様式は、豊後犬飼の「神宿環状列石」からの流れであろう。

それでも、この神社の巨石遺構は、築造当時から形が変化しているように感じられた。

地元の人々に巨石文化の価値が理解されていなければ、巨石遺構から次々と石が持ち出されてしまうのである。

JR宇佐駅から別府方面へ鉄道

で一区間の西屋敷駅。

その駅の近くには、「向野（むくの）神社」という社がある。

この社は行政面において、速見郡山香町の向野という土地に属しているものの、地理的には宇佐平野の最も奥で、国東半島の付け根のような位置に当る。

向野神社の立石遺構は三つ在り、形は板状や角錐状であった。

それらの高さは一メートルくらいであったり、二メートル近くであったりしたが、立石の配置には法則性が感じられなかった。

やはり、この「向野神社」においても、巨石遺構から石が持ち出されてしまったのではないか。

だが、その背後に見える御許山（おもとやま）は、宇佐神宮の神体山である。

（宇佐神宮の神体山には、大元山、馬城峯《まきのみね》という別名もある）

神体山頂上までの距離は、宇佐神宮よりも短く、この神社と巨石遺構の古さを感じた。

なお、御許山の頂上部分は禁足地となっており、その場所への立ち入りを許されている人は、宇佐神宮の宮司だけであるらしい。

その頂上には、三つの巨石が在り、宇佐神宮の祭神「比売大神（ひめのおかみ）」の霊跡だとされている。

三女神、三つの巨石。三という数には何かの意味があるのだろうか。

#### ・安心院盆地の米神山

一九九五年三月末、初めて安心院盆地を訪れた。

その研究旅行では、大分県内のJR中津駅から安心院まで運行しているバスに乗って、まずは安心院のバスターミナルへと向かった。

目的は、巨石の山として名高い、米神山（こめかみやま）である。

バスターミナルの職員に、米神山までの交通について尋ねると、このターミナルからJR別府駅までを結ぶバス路線の途中、佐田という土地



で下車して、そこから宇佐神宮の方面へ続く道路を歩けば良いという。鉄道も通っていない盆地なので、バスの便は少なく、交通は不便である。

佐田という土地は、安心院町役場がある場所から東北東へ四キロメートルくらいに位置している。

佐田のバス停で下車すると、近くに小さな丘が見え、その上に神社があった。

丘の上の「佐田神社」からは、山並みが東西に連なる米神山が見えた。

しかも、本殿の裏に周ると、七本の立石遺構が直線状に並んでいた。

米神山が本殿ならば、この丘と立石群は拝殿のような役割があったのだろう。

安心院盆地においても、小丘に立石遺構を築く構造が見受けられる。

ただ、これらの立石遺構の配列が、築造当時の姿だと考えてよいのか。

この立石遺構についても、破壊を受けているような気がした。

「佐田神社」から北へ二キロメートル



トル近く歩くと、道路の右側に何本もの立石遺構が姿を現す。

これが巨石遺構として有名な「佐田の京石」である。

「京石」の名については、安心院の民間伝承に由来が語られている。

民間伝承は、それを語る老人によって微妙に違いがあるものの、「京石」の由来は、おおよそ以下のよう

な内容の話である。

「神武天皇が米神山を訪れた時、この山には女神が住んでいた。女神

は天皇に対し、『ここに都を定めてくれたなら、一日で千本の石の雨を降

らせてあげましょう』と言った。し

かし、ここに都は定まらなかったの

で、石の雨は九九九本で降り止んだ。」

つまり、この場合の「京」とは、天皇の都を意味した言葉である。

ここで思い出すべきことは、「日本書紀」の記述である。

景行天皇は初めて九州に上陸した時、その場所に「京」という名を付けた。

宇佐地方には景行天皇の伝承があるはずだ。

「佐田の京石」は、日本国内の立石遺構としては、最も規模が大きい

部類に属している。

現地を訪れてみると、「京石」には大きく分けて二つの区画があることが判る。

米神山に向かって左側の立石群は、土を盛り上げた塚の内外に大小

八本の立石があり、「京石」と言えば、こちら側を想像する人が多い。

一方、向かって右側の区画では、やや大きい二本の立石が、一本は立

ち、もう一本は倒れ、その間には小



さい立石も一本立っていた。

少し驚いたことは、右側区画の手前と奥に支石墓のような石組が二基見えたことである。

「京石」の築造年代や如何に。

その年代を推測する一つの手段として、右側区画の石組を支石墓だと仮定してみる方法もあると思う。

紀元前六世紀頃、朝鮮半島から玄海灘沿岸地方に、基盤のような形の墓制（支石墓）が伝わった。

支石墓を伝えた民は、水田稲作の伝承者でもある。

その墓制が伝わった頃の水田稲作遺跡や支石墓遺跡からは、一つの様式の土器が出土する場合が多い。

それは「夜臼（ゆうす）式土器」と呼ばれ、縄文から弥生への転換期の土器様式だと言えそうだ。

日本国内の支石墓文化の原点は、唐津から博多にかけての地域であり、宇佐地方に支石墓が伝わったとするならば、その原点から少し年代が経過した頃だと考えた方が良さそうだ。

「神宿」の近くからも「夜臼式土器」が出土しているようだ。

よって、「京石」からも「夜臼式土器」が出土する可能性があると思う。

また、「京石」の中でも支石墓のような石組だけは、他とは異なる年代に築造されたと仮定する方法もある。

支石墓の分布地域は北九州に限られているようであり、それは一世紀頃まで造られ続けたらしい。

一世紀、北九州連合の中枢地域は現在の博多に在り、その地域を文献では「奴国」と呼んでいる。

「奴国」の王は、後漢の皇帝から金印を授かるほどの勢力を持っていた。

「奴国」の王墓は、何と支石墓である。

その頃、宇佐は北九州連合の一国だったのだろう。

「京石」右側の区画から、「奴国」様式の土器が出土する可能性があると思う。

「京石」の左側の区画は、何らかの様式を継承した巨石遺構なのだと

感じた。

それは、二本の立石を並べて立てる様式である。

高さ二メートル近い塚の内側には、右手前と左手前に、それぞれ二本一組の立石が並んで立っていた。

左手前の立石は、高さが二・八メートルくらいで、「京石」の中では最も高い石である。

塚の最上部には、注連縄を巻いた立石が一本立っていたが、その右下には幾つかの石塊を集めた基礎構造が見えた。

そばには一本の立石が倒れていたため、この二本も古代には並んで立っていたのであろう。

塚の外側には、やや低い立石が左奥に一本立っており、やや高い立石が左手前に一本立っていた。

塚の内側に六本、外側に二本、左側の区画には合計で八本の立石があった。

二本一組の構造は、明確な意味を持っていない。

立石文化が発生した縄文中期の飛騨地方では、立石二本の意味は親

と子であり、縄文晩期の飛騨では、

その意味は“男と女”である。構造の観点から考えるならば、立

石二本の長さが大きく異なっていれば“親子”を示しており、長さが近ければ“夫婦”を示した構造だといえる。

右側区画の立石については、二本一組+αであり、その意味は“両親と子”であろう。

塚内側の三組の立石は、三組の夫婦、三代の夫婦、いずれかを示した構造なのではないか。

その意味が三組の夫婦だとすれば、済州島の創世神話を思い出ししてしまう。

では、ここで「京石」の構造を分析するため、立石遺構を五つの要素に分解してみよう。

一つ目の要素は、個々の立石の大きさ。

二つ目の要素は、立石の並べ方。

三つ目の要素は、立石の築造場所。

四つ目の要素は、立石の使用目的。

五つ目の要素は、それ以前の立石

遺構には無い新しい構造。

一つ目の要素については、「京石」の石は、縄文時代における飛騨や美濃の立石遺構よりも、明らかに大きくなっている。

二つ目の要素については、「京石」の様式は縄文晩期飛騨の様式に近い。三つ目の要素については、縄文時代の飛騨とは築造場所が異なっている。

「京石」は「下山環状列石」と同じく、神体山の麓に築造されている。それ以後の傾向として、より高い場所に巨石遺構が築造される場合がある。

四つ目の要素については、米神山への魂送りの為であることは確かである。

さらに、中腹の巨石についても参考にする、新たな可能性が判明する。

五つ目の要素については、塚の外に石を立てるといった構造が新しい。九州の環状列石では、「神宿」で初めて、塚や小丘を環状列石で囲む

構造が生まれたようだ。

だが、「京石」と「神宿」では、どちらが先に築造されたのが推測に苦しむ。

縄文の民は、塚と巨石遺構を合体させるという着想を、一体どこで思いついたのか。

ただ、まず最初に「下山」が築造されて、少し後に「神宿」や「京石」が築造された事は確かだろう。

立石遺構としては、「京石」は九州で初めて築造されたのではないか。

研究旅行においては、これまで幾つもの偶然の出会いがあった。

一九九五年三月の九州旅行では、「京石」で一人の翁と出会った。

その翁、Aさんは、「京石」で開催している村おこしの祭の実行委員だという。

Aさんは、僕が愛知県から来ている旨を話すと、米神山巨石群の案内を引き受けてくれた。

「京石」の敷地に立っていた案内板には、米神山一帯の巨石遺構の場所が記されていた。

「日の神谷」、「月の神谷」、「平成の京石」、「四方仏」、「こしき石」、などという名称を見ていると、ここが巨石の町だということ実感が湧いてくる。

しかし、まず始めにAさんが案内してくれた場所は、案内板には記されていない巨石遺構だった。

何と、それは景行天皇に関する民間伝承が伝えられている巨石だという。

「京石」から北へ続く県道を少し進むと、右手へと入って行く林道が見えてきて、問題の巨石遺構は、県道と林道に挟まれた場所に立っていた。

その辺りは地形が全体的に盛り上がっていて、塚か小丘の上である。その立石遺構は高さが一メートルくらいで、手前には人頭大の石が一つ置かれていた。

「この立石は地元の人々から、景行天皇の妾の墓だと呼ばれておりま



景行天皇妾の墓

す。景行天皇の軍隊は、戦に勝った事を祝って、この辺りで宴会を催したと伝えられております」Aさんの話を聞いて、宇佐の巨石文化の謎が解けていくような気がした。

本当に、安心院盆地に神武天皇が来たのか。

文献や伝承を過信すれば、真実は辿り着けない。

南九州の豪族は、北九州の豪族に勝てるほどの勢力を持っていたのか。

肥沃な土地で稲作を行ない、大陸から支援を受けている北九州と、やせた土地である為に食料生産が困難で、多数の人口を養えない南九州。

戦が起こったならば、北が勝つ可

能性が極めて高い。

考古学的には、ヤマトからの波が宇佐に及んだ事が真実である。

神話伝承の観点から考えても、「京石」の名の由来と「日本書紀」景行天皇記とは、明らかに対応している。

米神山伝承の(WHO)の部分は、長い年月の経過によって、神武から景行天皇に変化してしまったのではない。

この立石遺構については、二本一組の構造が少し変化した形だと表現しても良いだろうし、伝承も参考にして推測すれば、その意味は、母と赤子“ではないのか。

そこから林道を少し進むと、米神山の西北麓に辿り着き、その辺りに登山道が見える。

道端には二本の立石遺構が立っていて、これが案内板で記されていた「四方仏」だという。

よく見ると、小さい立石の表面には四面に仏像が刻んであり、もう一つの板状の立石は、高さが一メートル

ルくらいだった。

この二本の石は、このような加工が当初から施されていたのだろうか。いつの時代にか、小さい石の表面に仏像が刻まれたのだろうか。

「四方仏」の位置から、下の方向へ目を移すと、田んぼの中に奇妙な形の石が見えた。

案内板では、これを「こしき石」と記しているものの、もう一つ「暴風石」という名があるという。

「暴風石」が立っている場所まで下りて行くと、その姿に驚いてしまった。

一つの立石が米神山の頂上を指し示すように斜めに傾いて立ち、その先端には円盤のような形の石が乗っているのである。

ここから眺めた米神山の姿は穏やかな円錐形で、神体山に相応しい形だ。

伝承では、この円盤形の石を取り外すと大風が吹き荒れるという。

「暴風石」の名の由来である。しかし、この「暴風石」は、ここ

に古代から立てられていたのだろうか。

この珍妙な姿は、立石遺構の原形から大きく離れた構造である。それでも、神体山に魂を送るための構造は継承されているようである。



「あんた、今晚、ワシの家に泊まっていたいかなか」

Aさんの好意により、その日は一晩泊めていただいた。

Aさん宅は、熊(くま)、という土地にあった。

熊という土地は、佐田から少し北へ行った所の峠であり、安心院盆地

と宇佐平野の境界である。

この辺りは民家が少なく、古代の風景が少しは残っている。

北には御許山、南には米神山、熊という土地は、二つの神体山に挟まれていて神秘的だ。

宇佐神宮の境域を流れる寄藻(よりも)川は、この峠を源流としている。

熊という地名には、何かしら古代の記憶を感じる。

ちなみに、豊後日田には、隈(くま)という地名が多い。日隈山、月隈山、星隈山など、日田盆地内の低山や丘には、天体の名が冠せられていて、古代九州の世界観が感じられる。

“クマ”とは、九州において、神を意味する言葉なのだろう。

縄文時代には、熊はカムイの化身だと考えられた。

もしかして、この地名には縄文時代の記憶が宿っているのだろうか。

佐田という地名についても考えてみた。

サタとは、岬を意味した古代語なのだろう。

愛媛県の西端は佐田岬半島、鹿児島県大隈半島の南端は佐多岬と呼ばれ、徳島県阿南市域の岬には佐田神社がある。

では何故に、サタ地名が内陸の盆地にあるのか。

地質学では、かつて安心院盆地は湖であったという。

確かに、米神山の辺りは安心院盆地の北端に位置しており、大昔には盆地に張り出した岬だったのだろう。

そうすると、安心院盆地のサタ地名には、ここが湖であった頃の記憶が宿っていることになる。

何と古い地名なのだろう。

縄文時代の末か、それ以前か、それ以後か、ウサ平野からクマ峠を越えて、巨石文化の民がアジム盆地を訪れた。

その時、盆地は湖であったのか、あるいは湿地帯であったのか、それは定かでないとも、米神山一帯は盆地に張り出した岬であった。

巨石文化の民は、盆地の北の端に

定住し、遠い祖先から伝えられてきたように、石の柱を二本づつ並べ立てて、祭りの場とした。

そして、その土地にサタという名を付けて、代々に渡って呼び習わした。

翌日の午前、Aさんの案内で米神山に登った。

米神山の標高は、四七五メートル。

「四方仏」の立っている辺りからは、山の中腹までの登山道が続いていて、そこまでは比較的ゆるい坂が続いていた。

山の頂上から西北方向の中腹に立つ二本の立石遺構、それは「日の神谷」と呼ばれている。

二本の高さは四メートル近く、共に少し傾いて、同じ方角の空を指し示しているようだった。

登山の時には方位磁石を持っていなかったけれど、二本が傾く先は東北方向ではないのか。

国東半島の猪群山（いのむれやま）では、山頂に立つ神体石が東北の空を指し示していた。

宇佐と国東の神体山では、大きな



立石遺構が東北の空に向かって屹立しているのである。

古人にとつて、これらの立石遺構が指し示す先には、魂の行き着く天上界があったのだろう。

米神山や猪群山は、天上界への中継地点だったのだ。

また、築造場所の観点から考えれば、高い位置に立てられた立石遺構の方が、より新しい時代に造られたのではないか。

なお、Aさんの話では、米神山の南側の中腹には、「月の神谷」と呼ば

れる立石遺構があるという。

しかし残念なことに、近年になって、その立石は折れてしまった、との事である。

日田盆地と同じく、宇佐においても、山に天体の名を付ける習慣があったようで、古代人の優れた美的感覚に感心した。

日の神などという言葉を聞くと、「日本書紀」の記述を思い出す。

日の神とは皇祖神を示した言葉ではなく、それは宇佐の神体山と巨石文化に深く関係していて、きっと太陽信仰を示した言葉なのだろう。

「日の神谷」の近くには幾つかの巨石の集まりがあつて、頂上まで登るため、その岩場をまたいで上へ登って行つたと記憶している。

当時、登山道は「日の神谷」まで続いているだけだった。

中腹から頂上までは急な坂が続いていた。

米神山の頂上部は東西に連なっていて、登りついた場所は頂の西端だった。

そこには適度な大きさの石が幾つか集まっていた。

「京石」の案内板には、頂上に環状列石があると記されていた。

しかし、それは環状列石と呼べるような配列を持っていなかった。

それは直径十メートルくらいの円形の範囲に、大小様々な形の石が十個くらい集まった巨石遺構だった。

専門用語では、そのような遺構を「配石遺構」と呼んでいるのだろう。

頂上の配石遺構が環状列石の流れに属するとすれば、この遺構の配列は、環状列石の原点から大きく離れた形だといえるだろう。

それでも、配石遺構の中央辺りには、やや小さい立石遺構が立っていた。

これは北極星信仰の記憶であろうか。

築造場所の観点から考えれば、この配石遺構が造られた年代は、「京石」や「日の神谷」よりも後なのではないか。

大分県の巨石遺構の中でも、最も

古い時代に築造された遺構は、やはり神社の境域には成らなかつたようだ。

「下山」、「神宿」、「京石」の三箇所は、九州最古の巨石遺構なのだろう。

米神山巨石群は、千年以上の長い期間に渡って、少しずつ形を変化させながら築造され続け、それに伴って祭祀が行なわれたのではないか。

個人的には、それらは以下のような順に築造されたと考えている。

「京石」、「四方仏」、「日の神谷」、「月の神谷」、頂上の配石遺構、「景行天皇の妾の墓」、「暴風石」。

「京石」内の、支石墓のような石組は、上石の下が積石構造になっているようなので、今後の研究に課題が残る。

一説には、支石墓は二世紀以後も、形を変化させながら南九州に伝わって行ったという。

### ・ 三女神社

宇佐平野から安心院盆地に入るためには、熊峠を越える方法と、駅館川を遡る方法がある。

駅館川は安心院盆地に入って津房川と名を変え、佐田川、釜の口（うけのくち）川、などという支流が本流に注いでいく。

釜の口川が津房川と合流する一キロメートルくらい手前の北岸、盆地の北端の傾斜地に、三女神社と呼ばれる古社がある。

三柱の女神を祭神とする神社である。

境域に入ると、玉垣で囲われた一角に何本もの立石遺構が立っていた。

やはり、安心院盆地の北端には古い伝承と巨石遺構が多い。

だが、それらの立石は長い年月の間に破壊を受けて、元の姿を失っているように見えた。

多くの石が持ち去られ、立石は一箇所に集められて雑然と立てられ、後の時代に加工された四角い巨石が持ち込まれ、もはや築造当時の姿は想像できない。

「日の神が生まれた三柱の女神を、葦原中つ国の宇佐嶋に降らせられた。今、北の海路の中においてになる」

三女神社の縁起伝承では、この「日本書紀」の記述における宇佐嶋とは、この境域一帯であるという。

この縁起伝承には、縄文時代の記憶が感じられる。

宇佐といえは八幡信仰だが、それ以前の基層文化として三女神信仰があった。

しかも、三女神信仰は巨石文化と深く関係している。

御許山の三つの巨石、「佐田の京石」における三組の立石。

宇佐地方では、三という数が神聖であったのだろうか。

「日本書紀」の短い記述には、縄文時代の記憶と、済州島の神話と、ヤマトの勢力が北九州に及んだ時代の記憶が、高い密度で凝縮しているのだろう。

### ・ 妻垣神社

安心院盆地から水が引いて、おおむね陸地が出来上がった頃、巨石文化の民は盆地の南端などにも拠点を造っていく。

三女神社から南南東方向に二キロメートルくらいの場合に鎮座する妻垣神社。

この神社の向かいには、やや小さい山があり、その中腹には玉垣で囲われたイワクラがある。

妻垣神社の神体山は、小さいながらも形だけは整っている。

「京石」が造られた時代から何百年も過ぎてしまうと、宇佐地方では立石遺構を築造する習慣が衰退し、神体山とイワクラを祭る習慣が盛んになったのか。

妻垣神社は、神武天皇の伝承地として名高く、別名では、一柱騰宮(あしひとつあがりのみや)と呼ばれる。一柱騰宮とは、川の中に片側だけ柱を入れて建てた住居だという説がある。

妻垣神社の西には釜の口川が流

れている。

古代には、川の中と川岸をまたいだ住居を造ったのかもしれない。

「日本書紀」神武天皇記には、おおよそ以下のような記述がある。

「筑紫の国の宇佐に着いた。宇佐の国造の先祖で、名はウサツヒコ・ウサツヒメという者がいた。宇佐の川上に一柱騰宮を造って、天皇をもてなした。」

この説話についても、話の主役を神武天皇から景行天皇に換えれば、おおむね伝承が持つ違和感は解消する。

景行天皇と神夏磯媛、神武天皇と米神山の女神、ウサツヒコ・ウサツヒメ。

これら三つの伝承は、ヤマトの勢力が豊前地方に及んだ時代に形成された。

これらの伝承はヤマトと宇佐で別々に語られ、ヤマトでは作為を加えられて文献に記述され、宇佐では話の主役までもが変化してしまったのだろう。

なお、宇佐神宮の宮司、宇佐公康氏は、自身の著書「宇佐家伝承 古伝が語る古代史」(一九九〇年 木耳社)において、妻垣神社について語っている。

それによれば、妻垣の地は、宇佐族の族長ウサツヒコの住居であったという。

宇佐氏は、宇佐の国造の子孫だといふので、ウサツヒコは遠い祖先である。

しかも、宇佐家伝承によれば、ウサツヒコとウサツヒメの、さらなる祖先は三柱の女神だといふ。

九州において、初めてヤマトと同盟を結んだ豪族、宗像氏と宇佐氏は、三柱の女神を共通の祖先として語り伝えてきたようだ。

津房川を最上流域にまで遡っていくと、塚原という高原地帯がある。

由布岳、鶴見岳、伽藍岳、立石山、雛戸山、これら宇佐川の源流の山々に囲まれて、塚原高原には別世界のような神秘感が漂う。

塚原という名は、この高原に多くの塚が存在することから名付けられた。

ここに多数の塚が存在する理由は、地質学的には、この辺りが世界有数の温泉地帯であることと関係があるのかもしれない。

いにしえ、ここを訪れた縄文の民は、多くの塚を見て驚き、これらを遠い昔の神々の墓であるかのように感じたのではないか。

そして縄文の民は、自らが継承する巨石文化に、“土を盛り上げた塚”という要素を取り入れようと考えたのだろうか。

これらの塚は「九十九(つくも)塚」と呼ばれているけれど、この地方では、幾つかの塚がある場所を「スクボ塚」などと呼ぶ場合もあったのだろう。

塚原は、豊の国の“へそ”のような位置に存在し、楽園のように美しい。

続く